

受験番号	
氏名	

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 彦根城は、小さいが美しい城だ。わたしが高校に通っていたころは、入場料をとられることもなく、どこからでも自由に城山に登れた。①わたしはそこを散歩するのが好きで、よくひとりだけで城山に登った。

2 ゆったりした石段を登っていくと、道はすぐ、うっそうと茂った樹々に囲まれ、湿った土のにおいのする風が吹いてくる。城山の樹々は、籠城の際の役に立つようなものを全国から集めてきたといわれ、そこらで見かけない見なれぬ樹々が多かった。その樹の一本一本を、見上げたりさわったりしながら、ぶらぶらし、ときどき草かげで動く虫たちを、しゃがみこんで眺めた。城そのものよりも、城を取りまく樹や草につつまれるのが好きで散歩に出かけたのだ。

3 「友だち」のことを思うとき、そんな人間以外の草や木、石ころや虫などのことも思い浮かんでしまうのは、小さいころ、まわりの自然を友人のように感じていたからかもしれない。

4 陰の部分の友だち―ひとにいえぬことを、かわって聞いてもらい、なぐさめてもらえるような、人間以外の友―日記や、星々とはまた別の、光の部分でおつきあいたくなる「人間以外の友」もある。

5 小説や詩、音楽や絵にふれたとき、いい友だちにめぐりあった気持ちになることがある。編みものやプラモデルづくり、機械いじりなどだって、それが好きな人に

問1 この文章の話題は何ですか。次の文の()にあてはまる言葉を4・5段落中から六字で書き抜きなさい。

() ()のつきあいについて。

問2 ①「わたしはく城山に登った」とあるが、「わたし」が城山を散歩するのが好きだった理由を答えなさい。

問3 ②「草や樹々眺めること」とあるが、それはわたしにとってどういう存在なのですか。八字で書き抜きなさい。

問4 この文章の特徴として適切なもの一つを選び、記号に○をつけなさい。

ア 体験を振り返りながら、自らの思いを感性豊かなやわらかい表現を用いて語っている。

イ 自らの体験を通してたどりついた人間一般に対する思いを読者に強くうたったえている。

ウ 具体的なわかりやすい事例を挙げて、話題にたいする自分の主張を強い口調で述べている。

エ 空想的なたとえ話のあとで、現実的な自分の主張を述べ、メリハリをつけてまとめている。

とっては、友だちと出会っている気分だろう。わたしの場合は、それが②草や樹、虫や鳥、あるいは石ころや水たまりを眺めることだった。

6 ロマンチックな気分とも少しちがう。科学図鑑を片手にというのでもない。まわりの風物と自分が、いっしょくたになるような原始的なたのしみとでもいったらよからうか。

7 アニミズムということばがある。辞書をひくと、「自然界のあらゆる事物が、生物と無生物とを問わず、生命をもつとみなし、それに精霊、とくに靈魂觀念を認める心意」とある。そんな、アニミズムに近い感じだ。

8 子どものころは、たいていだけれども、「生物と無生物とを問わず生命をもつとみなす」体験をもつ。気がるに草や虫に話しかけたりする。わたしもそんな子ども時代をすごし、それが相性が良かったのか、未だにづづけているというような具合なのだ。

(工藤直子『まるごと好きです』より)

※籠城…敵に囲まれて、城の中に立てこもること。

精霊…山・川・動物・植物など、自然界にあるすべてのものにやどっているというたましい。

靈魂…たましいのこと

觀念…ある物事について頭の中にもっている意識や考え方の内容。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 人間以外の動物にとって、生きることとは食べることである。しかし、それを実現するには、いつ、どこで、何を、だれと、どうやって食べるか、という五つの課題を乗り越えねばならない。現代の科学技術と流通革命はその多くを個人の自由になるように解決してきた。24時間営業のコンビニエンスストアや自動販売機。車や飛行機などの輸送手段や、インターネットを利用した通信手段。電子レンジやファストフードなどの調理や保存の技術。これらは私たちが、いつでも、どこでも、どんなものでも、好きなように食べることを可能にした。

② しかし、技術によっては変えられない課題もある。それはだれと食べるかということだ。

③ ふだん単独生活をしているクマやカモシカのような動物には、この課題は必要ない。なわばりをつくって他者の侵入を防いだり、他者と出会わないようにして餌資源を確保したりすればいいからだ。しかし、群れをつくる動物は常にこの問題に直面する。とりわけ複雑な社会生活を営む人間にとって、いっしょに食べる相手は重要である。もちろん、移動手段の革新によって、遠くに住む知人や親族に合うことができるようになった。だが、だれと食卓を囲むかは、昔も今も個人の自由裁量によっては決められない。

④ 古来、人間の食事には、栄養の補給以外にも他者との関係の維持や調整という機能が付与されてきた。いやむしろ、他者という関係をつくるために食事の場や調度、食器、メニュー、調理法、服装からマナーにいたるまで、多様な技術が考案されてきたといっても過言ではない。どの文化でも社交の場として食事を機能させるために、莫大な時間と金を消費してきたのである。それは効率化とはむしろ逆行する特徴をもっている。

⑤ サルの食事は人間とは正反対である。群れで暮らすサルたちは、食べるときは分散して、なるべく仲間と顔を合わせないようにする。数や場所が限られている自然の食物を食べようとすると、どうしても仲間とはち合わせしてけんかになる。だから、仲間がすでに占有している場所は避けて、別の場所を探そうとするのだ。でも、あまりに広く分散すると、肉食動物や猛禽類もうきんにねらわれて命を落とすおそれが生じる。仲間といれば外敵の発見効率上がるし、自分がねらわれる確率が下がる。そこで、仲間と適当な距離を置いて食事をすることになる。

⑥ しかし、食物が限られていれば、仲間と出くわしてしまうことはある。そのときは、弱いほうのサルが食物から手を引っこめ、強いサルに場所を譲る。サルたちは互いにどちらが強いかわきまえていて、その序列にしたがって行動する。それに反するような行動をとると、周りのサルが寄ってたかって①それをとがめる。優劣の序列を守るように、勝者に味方するのである。

⑦ 強いサルは食物を独占し、他のサルにそれを分けることはない。サルの社会では、食物を囲んで仲よく食事をする光景は決して見られない。でも、サルの基本的な食物は植物なので、強いサルに独占されたからといって食物に困るわけではない。ちよつと移動すれば、食べられるフルーツや葉っぱが見つかる。要するに、サル社会のルールは、食べるときはけんかしないように分散して個食をしましょう、そのためには弱いサルが広く分散しましょう、ということなのである。

(山極寿一「ゴリラからの警告」)

問1 筆者はこの文章で何について論じていますか。次の文の()にあてはまる言葉を文章中から七字で書き抜きなさい。

群れをつくる動物にとつての課題は、() ()

問2 人間の食事にある機能を二つ、文章中から書き抜きなさい。

① () ()
② () ()

